

博士論文の要約

氏 名 莊 司 一 歩

論文題目 先史アンデス古期におけるマウンド形成の考古学的研究
——クルス・ベルデ遺跡における環境変動と集団的実践の変化

本論文の目的は、ペルー北海岸の古期（5000-3000 BC）を対象としたクルス・ベルデ遺跡の発掘調査と考古遺物の分析から、漁撈民の集団的実践と公共建造物の創出過程を明らかにすることである。これによって、環境変動および公共建造物の建設とそれに関わる集団の変容について考察し、アンデス文明史における古期の位置づけを再考する。本論文は研究の背景、調査データ、出土遺物の分析、データの総合と考察の4部に分かれており、計11章で構成されている。

第1部、研究の背景において、序論となる第1章では、公共建造物をめぐる問題系を整理した。従来、アンデスにおける公共建造物は、基壇や広場などで構成される神殿建築として形成期早期（3000-1800 BC）に建設され始め、社会統合の中心になってきた。しかし、その出現過程を詳細なデータによって実証した事例はほとんどなく、形成期以前の社会状況を解明するような研究の不足も認められる。そこで本論文では、神殿建築が出現する以前の古期において、北海岸に残されたマウンド状遺構（以下、マウンド）に焦点をあて、集団的な社会実践や公共建造物の創出過程を実証的に解明することにした。

第2章では、本論文で取り扱う時代と地域の全体的な位置づけについて、研究対象の時代的・地理的背景を整理した。とくに、議論を展開するうえで欠かせないペルー北海岸の自然環境について、古環境復元に関する先行研究を交えながら確認した。

第2部では第3章と第4章にわたって調査データの提示を行った。第3章では、チカマ川流域沿岸部に位置するクルス・ベルデ遺跡で実施された2016・2017年の発掘調査の成果を示した。調査の結果、マウンドは人為的な盛土と活動面が繰り返し積み重なって徐々に形成されてきたこと、その形成過程に変化が認められることが明らかになった。CV-Ia期（4200-4000 BC）において考古遺物を多く含む盛土とその表面が固くしまった活動面が交互に積み上げられるのに対し、CV-Ib期（4000-3800 BC）では、それに加えて粘土床が張られるようになる。また、多くの埋葬がマウンドに組み込まれるようになる。

第4章では、発掘調査によって出土した考古遺物についてデータを提示した。出土遺物として、石器・骨器・貝器などの人工遺物と動植物遺存体などの自然遺物、埋葬人骨などが挙げられる。とくに、自然遺物のデータは、CV-Ia期からCV-Ib期にかけて、生態資源利用に大きな変化があったことを示している。CV-Ib期では、とくにメジロザメ属などの大型のサメ類を集中的に利用するようになる。

第3部にあたる第5～7章は、出土遺物の分析結果を示すものである。第5章における人工遺物の分析によって、マウンドから出土した石器や骨器に使用痕や転用に伴う使用痕の切り合い関係が多く認められることが明らかになった。この結果は、人工遺物がマウンドに埋納するために製作された未使用の奉納品ではなく、様々な用途での使用を経て消耗・

破損したのちに放棄された廃棄物であったことを示している。

第 6 章では、出土した貝類の動物考古学的な分析結果を示した。CV-Ia 期と CV-Ib 期で出土量の変化する貝種の生態学的特徴は、この時期に生態環境の変化が起きていたことを示唆し、それに起因する個体群規模の変動に合わせて生態資源利用が再編されていた。

第 7 章では、環境変動の実態を探るため、貝殻を対象としたスクレロクロノロジーによる分析を行った。現生資料の分析結果は、エル・ニーニョ現象に伴って貝殻断面に大きな成長障害が残されることを示している。この成果を考古資料に適用した結果、CV-Ib 期に起きた環境変動とは、エル・ニーニョ現象の規模と頻度が増加するものであったことがわかった。

第 4 部となる第 8～11 章では、データの総合と考察を行った。第 8 章では、これまでに示してきたデータと分析結果をふまえて、環境変動、生態資源利用の変化、マウンド形成過程の変化という 3 つの要素の関係性を検討した。その結果、それらは密接な相互関係を持ち、CV-Ia 期から CV-Ib 期への明瞭な変化を生み出してきたことが確認できた。

例えば、CV-Ib 期で集中的に利用されるメジロザメ属の生態学的特徴は、エル・ニーニョ現象に伴う豪雨によって増大したラグーンなどの河口・汽水域を、漁撈集団が集中的に開発するようになったことを示唆している。さらに、マウンドは日々の食糧残滓が廃棄され、積み重なることで形成されるのであり、マウンドを覆う床面の形成はエル・ニーニョ現象の起きるタイミングと同期している。

マウンドの形成過程について丹念に検証してみると、CV-Ia 期のマウンドは、集団的な廃棄行為を通して形成される廃棄物の山としての性格を強く持っていたといえる。CV-Ib 期になっても廃棄行為は継続するが、そこには粘土床や埋葬が付加される。粘土床に示されるように視認性を意識した建設活動が明確化していくことは、マウンドを建造物として構築していくような意図が生じつつあったことを示しており、埋葬もまたマウンドに対する人々の認識が変化したことを示唆している。すなわち、この時期にマウンドは建造物として認識されるようになり、マウンド・ビルディングという集団的実践を通じて、それは公共建造物としての性格を帯びていく。

第 9 章では、チカマ川流域沿岸部に分布する他のマウンドとクルス・ベルデ遺跡のマウンドの比較を行い、クルス・ベルデ遺跡でマウンドの形成に参加してきた人々が生態資源利用やマウンドでの活動において独立した集団であったということを明らかにした。CV-Ib 期において、この集団は局所的に分布するラグーンを他遺跡の集団とともに利用する独立と共存の関係にあったと想定できる。このことが、各地で一斉に、それぞれ独自のマウンド・ビルディングが開始されるという現象を引き起こしていた。

第 10 章では、アンデス文明史におけるマウンドと神殿の関係を考察した。古期のマウンド・ビルディングと形成期早期の神殿更新(神殿を繰り返し作り替える行為)はともに、公共建造物を作り出し、維持していく社会実践である。双方に共通する性質は、それらが規則的に繰り返される建設活動であり、様々な残滓を適切な手続きで廃棄する行為と密接な関係を持つ点にある。ただし、マウンド・ビルディングでは、建築上のパターン認識が限定的であり、建造物の姿や建築要素の配置・区画を思い描くような空間利用の計画性は認められない。

結論となる第 11 章では、これまでの論述の要点を整理した。環境変動と生態資源利用の

再編を契機として、マウンドは公共建造物として建設され始める。本論文は、クルス・ベルデ遺跡の考古学データを通じて、マウンドを形成してきた社会实践の変化を明らかにし、ここに公共建造物の創出過程を実証した。従来まで、神殿建築の出現と同義とされてきた公共建造物の出現過程を問い直し、神殿建築とは異なる公共建造物の萌芽を古期において示したことになる。また、この反復的な実践によって、マウンドと行為者集団、日々の生態資源利用は強く結びつくことになり、マウンドを結節点として集団の凝集性と独自性が強化・維持されてきたことが明らかになった。形成期早期に始まる神殿更新やそれにもとづく社会統合が、古期に醸成されてきた社会関係や慣習の上に成り立つことを示唆するのであり、アンデス文明史における社会統合の過程を論じるうえで、古期の研究が大きな意義を持つことを明示した。